

「わたしの体験」が素晴らしいわけ

上うえ廣ひろ榮えい治じ

『倫風』ができたあがってくると、私は冒頭から編集後記まで一通りパラパラと頁ページを繰ります。それから、もう一度、タイトルや写真に目をはしらせながら頁をめぐり、目の止まったところや、読む気を誘われた記事から読み始めます。

先日もまた、ある記事から読み始めて、ふと気がついたのです。なんのことはない、私は毎号毎号、「わたしの体験」から本誌を読み始めるのが、習いであったのです。

理由は明快です。ここには、会友たちの「実践」そのものが語られているからです。うわべの言葉、頭の中だけの理屈や理論ではない真の実践のさまが、力強く、感動深く語られているからです。そんな記事に真っ先に目が止まらないはずがないのです。

そこで、何号分かの「わたしの体験」をまとめて通読させてもらいました。そして、どの記事にも「はじめて知った」「気づかされた」という言葉がちりばめられていることに「気づいた」のです。

そして改めて思ったのです。私たち人間というものは、なんと「自己中心的」な生き物であるのかと。ふ

だん、私たちは自分が何でも「わかったつもり」で生きています。人の言葉に真剣に耳を傾けることはありません。子どもにも周囲の人々にも、こうだ、こうすべきだと、自分の考えを押しつけようとはかりしています。何ごとであれ、自分が望んだとおりになって当然だと、思い込んでばかりません。

人の喜びにも、悲しみにも、深いところでは無関心です。人の真の思いを「知らない」だけでなく、思いやろうとすることも稀まれなのです。真実の姿について「知ろう」とする努力もせずに、「わかったつもり」になっている。自分本位の勝手な「偏見」によって判断し、自己中心的に生きています。だから、「はじめて知る」ことも、「気づく」こともほとんどないのです。

「わたしの体験」に語られているのは、そうした自己中心的な人間が、ある日突然、何らかの経緯で覚醒するドラマなのです。自分のことだけを考えて、慢心したり、諸事不足に思ったりして生きていた人が、周囲の人々の思いを「はじめて知った」「気づいた」瞬間、それはこのうえもなく美しく感動的な瞬間です。それは、人が自己中心的な偏見を捨てた瞬間でもあるのです。

偏見とは色眼鏡で人や物事を見ることです。その色眼鏡は歪ゆがんだ知識や自分本位の考え方に基づいて色づけられた眼鏡です。当然、それは真実の姿を写していません。人を否定し、あるいは貶おとしめ、自分の今を正当化する眼鏡です。

色眼鏡が無邪気な思い込みに留まる間はまだまだですが、偏見はしばしば、ある個人や特定の集団に対する非好意的な意見になります。それは客観的な根拠かたよがない偏った悪意に満ちた意見、ためにする意見ですから、それにとまなう感情もまた、卑しく低劣なものになってきます。

そして、「自分（たち）だけが正しい、他者は悪い」という偏見が、個人に向けられたときには差別やイジメを生み、集団に向けられれば敵対や争いをもたらします。

偏見がやつかいなのは、ただ真の姿を「知らない」だけではないことです。歪められた姿だけは「知っており」、しかもそれを「信じている」ことです。例えば、自分の子どもについてさえ、何でも「知っているつもり」になっていて、実は、子どもの真の姿や思いについて、何も「知らない」恥すべき親がたくさんいます。事が起こってはじめて、「うちの子にかぎって」と愕然とするのです。

考えてみれば、人々が何でも「わかつているつもり」になって生きているのは、いたしかたのないことなのかもしれません。しかし恐るべきは、多くの場合、人は偏見に妨げられて、真の姿を「知ろうとしない」ということです。

かつて古代のギリシア人たちは、人間をギリシア人とバルバロイ（野蛮人）の二種類であると考えていました。中国人は、自分たち中華の民のまわりには、南蛮、北狄、西戎、東夷という蛮族があると史書に記しました。また、ある時期までの欧米人のほとんどは、自分たち白人以外の有色人種を、人間以下の生き物だと感じていました。

そうした偏見のために、彼らは自分たち以外の人種や民族について、「知ろう」とはしなかったのです。他の民族と交わるときも、旧来の偏見をなぞる事例しか見ようとしませんでしたから、偏見はさらに強化されていきました。偏見が強化されれば、偏見から外れる事態には、争いや戦いで決着をつける他はありませんでした。

偏見に基づく戦争やジェノサイド（集団殺戮）という悲惨な体験を経て、偏見を排除しなければ、自分たちの平和や繁栄もあり得ないということに先進諸国が気づき始めたのは、やっと今から半世紀前のことではなかったのです。

この間の事情は、私たち個人においても同様です。いまだにほとんどの人々が、あの人はこういう人だ、

世間とはこうしたものだ、子どもとは、大人とは、男とは、女とは、商売とはこんなものだという、自分の偏見にとりつかれて生きています。いったん偏見にとりつかれると、容易にそこから脱け出せません。それどころか、自分の意見を守るために、よりいっそう偏見を強化しようとするのです。

他者に対する偏見を強化すればするほど、人と人の心は遠く離れていきます。偏見にとらわれている限り、愛和を実現することは不可能です。

家庭や社会の愛和を目指すのが会は、「現実大肯定」の実践を提唱しています。偏見はもちろん、あらゆる先入観、思い込みを排して、現実があるがままに見よ。人の言わんとするところに耳を傾けよ。そして、あるがままをそのままに受け止め、そこからより善い道を見極めよ、と教えています。

わが子と対するときには、相手がわが子であるということをおぼろげに忘れることです。可愛い、いとoshい、うるさい、憎い、こうなつて欲しい……、それらすべての思いを胸に収めて、表情を穏やかに保つて、わが子の言うところ、思うところを読み取るのです。

すると、たちまち体験することになるはずですが、この子がこんなことを思っていたと「はじめて知った」、これほど親のことを心配していたことに「気づかされた」ということを。

「わたしの体験」の随所に「はじめて知った」「気づかされた」という言葉がちりばめられているのは、ここに紹介されている方たちが、色眼鏡を外し、偏見や先入観を排して、現実大肯定を実践なさっていることの証あかしです。素直な心で現実をあるがままに受け入れた結果の「気づき」なのです。この方たちはみな、現実大肯定によって、周囲の真の姿を知り、愛和への大道を歩み始めているのです。

故ゆゑに私は希望するのです。もっともっとたくさんの、新鮮な発見をしていただきたい。美しい「気づき」を重ねていただきたい。そして、さらに感動的な「わたしの体験」を拝読させていただきたいものです。